
長野市松代町・清水寺の平安前期木彫諸像について ——薬師如来像・四天王像の図像上の特徴を中心に——

花澤明優美(清泉女子大学)

長野市松代町・清水寺伝来の諸像中では国指定重要文化財の観音菩薩像と地藏菩薩像が平安時代前期の作として論及されることが多いが、同寺薬師如来像と四天王像も観音・地藏像と近い時期に製作され、当初よりこれらとともに安置されたものとみられる。本発表では薬師如来像と四天王像の示す個性的な様式をひとつひとつ検討したうえで、清水寺伝来の平安前期諸像相互の関係を見直し、製作年代や造立背景を考えたい。

清水寺薬師如来像は同寺観音・地藏像と同じく9世紀末の作とみられる。類例の少ない特殊な姿の釈迦印を結ぶ薬師如来像で、着衣形式は天台宗系統の薬師如来像と共通する。三尺立像であることから、天台に作例の多い「七仏薬師」の一体であった可能性がある。一方で、衣文形式には飛鳥時代の金銅仏あるいは請来金銅仏の影響もうかがわれる。

四天王像はほかの諸像よりやや遅れる10世紀初め頃の製作で、伝持国天像は後補であるが当初像のかたちを継承しているとみられる。4軀すべてが兜をかぶる形式の四天王像は全国でほかに5例しか確認できないが、いずれも平安時代の地方作で、この形式は中央ではすぐに消え、地方で地域独自の形式として残ったものと想像される。

清水寺のある長野県北部には7世紀創建とみられる古代寺院善光寺がある。周辺には請来金銅仏が伝わっており、中国南朝の影響下に造られたとみられるものが多い。それらの衣文形式の一部を清水寺薬師如来像が継承しており、観音菩薩像の着衣形式にも古代金銅仏の影響がみられる。これらは古代において長野県北部が朝鮮半島経由で大陸とのつながりが強かったことと関係する可能性がある。この地域は有力氏族の活躍を通して中央とも早くから結びついていたが、氏族の活躍がピークに達した9世紀後半、仁和4年(888)に長野県東北部の広範囲を大洪水、いわゆる「仁和の洪水」が襲ったことは注目される。寺社の多くも移転・再建の必要に迫られたとみられる。清水寺観音菩薩像と地藏菩薩像は中国唐時代に流行した観音・地藏一対で祀る「放光菩薩」の信仰が日本に伝わった頃の作例と考えられるが、放光菩薩には水難救済の効があり、七仏薬師にも洪水鎮圧の効がみとめられることから、清水寺諸像造立の契機に仁和の洪水があった可能性が考えられる。四天王を含むことから、一連の造像が災厄克服を目的とした公的な造像であった可能性は高い。

以上のように清水寺諸像それぞれの特徴を確認し、相互の関連を理解すると、一部に奈良時代をさかのぼる古像の影響を残しながら、中央で採用された新しい様式をいち早く取り入れた造像の水準が浮かび上がってくる。これらを平安時代前期における長野県北部の造像の実態としてとらえ、古代の地方造像を考える一視座としたい。